

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年5月16日現在

機関番号：14302
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011～2013
 課題番号：23730612
 研究課題名（和文） 学習と動機づけの自律化プロセスと学習支援ニーズの多様性に関する研究
 研究課題名（英文） Research on the developmental process of autonomous learning and motivation, and the diversity of learning support needs
 研究代表者
 伊藤 崇達（ITO TAKAMICHI）
 京都教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：70321148

研究成果の概要（和文）：まず、学習支援ニーズに関する議論を整理し、教育心理学の観点から理論化を図った。次に、学習困難の事例をもとに子どもの視点からみたニーズと支援する側からみたニーズを明らかにした。また、親による動機づけ支援に関して青年期の子どもがどのようなニーズをもち、評価をしているか、両者のズレによって自律的動機づけに違いがみられるのか、明らかにした。さらに、中国語学習において教師による“Normative needs”と“Felt needs”の視点から実践への示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：Firstly, this study aimed to review research about learning support needs and theorize them from the view of educational psychology. Secondly, it clarified what kinds of support needs from the perspective of children and supporters were. In addition, it examined that adolescents needed and evaluated parents' motivational supports, and these discrepancies between needs and evaluations were related to their autonomous motivations. Implications for practice were discussed from the view of “Felt needs” and “Normative needs” for teachers in learning Chinese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1300000	390000	1690000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学習支援ニーズ・動機づけ・自律化

1. 研究開始当初の背景

近年、学習者の視点やニーズが理念として掲げられているが、精緻な議論や実証的な検討が十分になされているとはいえない。実践の有効性を高めていくためにも、教育心理学の観点から学習支援ニーズとは何かについて概念化、理論化を図っていく必要があるだろう。

学習支援においては学習者の自律性を高めていくことがめざされる。自律的学習のあり方は、欧米では自己調整学習として理論化

が進められてきている。自己調整学習に関する研究では認知行動論の立場が力をもっており、発達論に基づく検証は十分になされていない。教師とともに親のかかわりやサポートは子どもの自律的学習を支えるリソースとして大きな役割を果たしているはずである。親や教師の存在をふまえて、学習支援ニーズの多様性のあり方や学習と動機づけの自律化のプロセスに関して検証を進めていく必要がある。

2. 研究の目的

本研究の第1の目的としては、学習支援ニーズに関する議論を整理し、教育心理学の観点から理論化を図ることであった。

第2には、親や教師の存在をふまえて、ニーズに応じた学習支援のあり方に関して実践に資する実証的な知見を新たに得ることを目的とした。

主たる研究は以下の3つのものにまとめられる。方法と結果について主要な点に絞ってまとめることにする。

3. 研究の方法

(1) 学校心理学や社会教育の領域などでの先行研究をふまえて学習支援ニーズに関する議論を整理した。

さらに、教員養成系の大学生に学習困難の子どもの事例を提示して、子どもの視点に立つと、どのような支援ニーズを抱いていると推測されるか、また、子どもを支援する側の視点に立つと、どのような支援ニーズを汲み取るものと推測されるかについて調査を行った。

中学生・高校生の子どもをもつ保護者に対しても、子どもの学習上の支援ニーズをどのように捉えているかについて調査を行った。

(2) 親による動機づけ支援に関して青年期の子どもがどのようなニーズをもち、評価をしているか、両者のズレによって自律的動機づけに違いがみられるのか、また、どのような支援ニーズが切実であるかについて調査を行った。これは大学生を対象とした回顧式の調査であった。

(3) 新奇で未知な学習の状況において多様な学習支援ニーズが存在することが考えられる。中国語学習をそのような状況の1つとして位置づけ、調査を行った。教師からみた支援ニーズ(“Normative needs”)と学習者の視点に基づく“Felt needs”の関係について検討を試みた。

4. 研究成果

(1) 学校心理学や社会教育における先行研究のレビューを行い、子どもの学習支援ニーズを捉える図式について提示した。“Felt needs” / “Normative needs” (Griffith, 1987; Pearce, 1995)、“Expressed needs” / “Inferred needs” (Noddings, 2003)、支援者によるニーズの把握の有無 / 学習者によるニーズの自覚の有無の2次元の図式などをふまえて、学習困難の子ども事例をもとに調査を行った。

その結果から、子どもの視点からは「対話」「人間関係」「理解の困難」「興味・関心」「意欲の問題」「気持ちのコントロール」「友人との差異」といったカテゴリーが抽出され、一方、支援者の視点からは「対話」「成功体験」「個別の支援」「注意集中の支援」「内発的動機づけ支援」「学習習慣」「学習の方法」「体験による学び」といったカテゴリーが抽出された。

次いで、保護者を対象に、特に動機づけと学習方略に焦点をあてて学習支援ニーズについて調査を行ったところ、「動機づけのコントロール」「動機づけが限定的であること」「動機づけが他律的であること」「動機づけの喪失」「目標の喪失」といったカテゴリーが抽出された。学習方略については「時間の管理」「学習方略の工夫」「プランニング」「自律と探求」「ながら勉強」「苦手の克服」「詰めの甘さ」「精神力」「人から学ぶこと」「予習・復習」「自己評価」といったカテゴリーが見いだされた。

こうした知見をふまえ、支援者と学習者の関係からみたニーズの図式について検討を行った。この図式に従えば、学習者もニーズに気づかず、支援者も把握できていない支援ニーズの領域が存在することが考えられる。こうした支援の届かない領域を狭めていくためには、様々なアプローチが考えられるが、自己調整学習が1つの鍵を握っているということ考察した。

また、図1にあるようにニーズがどのようなプロセスを経て生起されてくるかについて仮説的なモデルを提示した。最終的に、自己調整学習の理論をもとに、質の高いニーズへの転換を図ること、ニーズが生成されてくる心理的プロセスをふまえた学習支援の必要性について指摘をした。

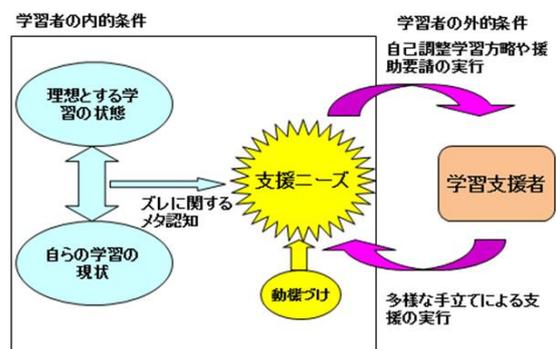


図1 学習上のニーズの生成に関する心理的プロセス・モデル

(2) 自己決定理論に基づき、親による動機づけ支援として「自律性支援」「関与」「温かさ」を取り上げた。全体としてみると、母親と父親のいずれの支援もニーズに対して評価が上回っていた。また、「関与」よりも「温かさ」、これらよりも「自律性支援」が重要であることが示された。これらの結果について表1に示しておく。

表1 母親と父親の動機づけ支援のニーズと評価の平均 (SD)

動機づけ支援	母親		父親	
	ニーズ	評価	ニーズ	評価
自律性	11.68 (3.92)	12.87 (2.81)	11.36 (4.22)	13.05 (3.38)
関与	9.85 (3.75)	12.71 (3.14)	9.33 (3.67)	10.35 (3.59)
温かさ	10.85 (4.04)	12.55 (3.07)	10.31 (4.07)	11.79 (3.51)

次に、親からの動機づけ支援のニーズと評価のズレによって自律的動機づけに差異がみられるかについて検討を行うために、以下の3つの群を設定した。「評価-ニーズ」の計算によって、正の値を「+」群、「0」の値を一致群、負の値を「-」群とした。「+」群はニーズを満たしているグループ、一致群はニーズと評価が一致、「-」群はニーズを満たしていないグループと考えられる。これらの3群を独立変数とし、自律的動機づけを従属変数として、1要因分散分析(対応のない要因)を行った。

主たる結果としては、表2、表3にあるように両者のズレに関しては母親も父親も「自律性支援」と「温かさ」においてニーズを満たしていない「-」群で自律的動機づけが低いということが明らかとなった。先行研究が示してきた支援が動機づけを高めるという側面だけでなく、支援にあたってはニーズと評価のズレをも考慮することの重要性が明らかにできたといえる。青年期には、とりわけ、「温かい」人間関係をもとに自律性を支えていくことが求められているといえるだろう。

上記のズレには、支援が十分でなくニーズが充足されない場合と、反対に、ニーズは低い、支援者は支援の必要性、重要性から働きかけを十分に行っている、すなわち、評価は高い場合とがあることを示している。これらをニーズの切実さの指標として(cf. 三山, 2008)、さらに別の分析を試みた。その結果として、父親の「自律性支援」が特に切実なニーズとなっていることが示された。

表2 母親の動機づけ支援のズレの3群ごとのSDIの平均(SD)

動機づけ支援	母親		
	「-」群	一致群	「+」群
自律性	-0.19 (11.81) (n=154)	3.19 (10.94) (n=69)	3.25 (10.79) (n=224)
関与	1.66 (12.08) (n=74)	1.63 (10.71) (n=57)	2.22 (11.20) (n=316)
温かさ	-0.19 (11.42) (n=129)	3.47 (11.08) (n=76)	2.81 (11.12) (n=242)

表3 父親の動機づけ支援のズレの3群ごとのSDIの平均(SD)

動機づけ支援	父親		
	「-」群	一致群	「+」群
自律性	-0.40 (11.27) (n=144)	3.13 (12.06) (n=63)	3.24 (10.86) (n=240)
関与	0.61 (11.71) (n=153)	1.74 (10.66) (n=62)	3.09 (11.07) (n=232)
温かさ	0.69 (10.88) (n=140)	0.78 (10.39) (n=80)	3.34 (11.69) (n=227)

(3) 学習支援ニーズは多様な学習領域に着目して明らかにしていく必要があると考えられる。中国語学習を取り上げて、どのような学習支援ニーズの要素が存在し、また、「Felt needs」と「Normative needs」の視点から支援ニーズの実態を明らかにすることを目的とした。本研究では、さらに、学習支援ニーズと外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、内発的動機づけの4種類の動機づけの間にどのような関連が認められるかについて明らかにすることと、「Felt needs」と「Normative needs」の2つの側面のニーズの有無によってこれらの動機づけに違いがみられるのかどうかについて明らかにすることを目的とした。

予備調査に加えて、日本人大学生を対象に質問紙による調査を実施した。因子分析の結果から「会話」「語彙」「文化・歴史」の学習支援ニーズが存在することが明らかになった。相関分析を行ったところ、これらのニーズと取り入れ的調整、同一化的調整、内発的動機づけの間に正の相関が認められた。表4-1、表4-2にその結果を示しておく。外的調整ではなく、取り入れ的調整、同一化的調

整、内発的動機づけのように中国語の学習に対して積極的な動機づけが高い人ほど、「会話」「語彙」「文化・歴史」のいずれの学習支援ニーズも高いことが明らかとなった。しかしながら、取り入れ的調整と内発的動機づけでは、学習支援ニーズの意味合いも異なっている可能性があり、語学の習得レベルなどの指標とも併せて今後のさらなる検討が求められる。

表 4-1 中国語の学習支援ニーズ（会話、語彙）と 4 種類の動機づけの間の相関係数

	会 話	語 彙
外的調整	-.13	.03
取り入れ的調整	.29 **	.46 **
同一化的調整	.69 **	.60 **
内発的動機づけ	.58 **	.60 **

** $p < .01$

表 4-2 中国語の学習支援ニーズ（文化・歴史）と 4 種類の動機づけの間の相関係数

	文化・歴史
外的調整	-.02
取り入れ的調整	.37 **
同一化的調整	.62 **
内発的動機づけ	.61 **

** $p < .01$

次に、中国語の科目を担当している大学教員 2 人による評定をもとに“Normative needs”を取り出した。そして、“Felt needs”と“Normative needs”の平均得点をもとにして「ニーズ保有群」と「非ニーズ群」の群分けを試みた。これらの両群の間の 4 種類の動機づけにおける差異を検討した結果を表 5-1、表 5-1、表 6-1、表 6-2 に示しておく。

表 5-1 “Felt needs”の 2 群による 4 種類の動機づけの差異

	非felt needs群
外的調整	2.25 (0.85)
取り入れ的調整	2.92 (0.92)
同一化的調整	3.20 (1.18)
内発的動機づけ	2.55 (1.08)

** $p < .01$

表 5-2 “Felt needs”の 2 群による 4 種類の動機づけの差異

	felt needs保有群	t 値
外的調整	2.14 (1.13)	<i>n.s.</i>
取り入れ的調整	3.65 (1.06)	3.30**
同一化的調整	4.62 (0.58)	6.95**
内発的動機づけ	4.19 (0.82)	7.68**

** $p < .01$

表 6-1 “Normative needs”の 2 群による 4 種類の動機づけの差異

	非normative needs群
外的調整	2.29 (0.91)
取り入れ的調整	2.85 (0.93)
同一化的調整	3.21 (1.04)
内発的動機づけ	2.56 (1.03)

** $p < .01$

表 6-2 “Normative needs”の 2 群による 4 種類の動機づけの差異

	normative needs保有群	t 値
外的調整	2.21 (1.10)	<i>n.s.</i>
取り入れ的調整	3.63 (1.03)	3.67**
同一化的調整	4.47 (0.90)	6.03**
内発的動機づけ	4.04 (0.97)	6.90**

** $p < .01$

これらの結果をふまえて、“Felt needs”と“Normative needs”という学習者及び支援者の視点から実践への示唆について議論した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

(1) 伊藤崇達、モチベーションを高めて行動につなげてもらうために—自己調整学習の心理学理論にもとづいて—、保健師ジャーナル、査読無、69(5)、2013、361—365

(2) 伊藤崇達、学習支援ニーズと自律的動機づけとの関係—中国語学習者を対象として—、京都教育大学紀要、査読無、122号、2013、1—9

(3) 伊藤崇達、学習支援ニーズはいかに捉えられるか—学習支援研究の可能性—、京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報、査読無、2号、2012、1—12

(4) 伊藤崇達、青年期における親に求める動機づけ支援のニーズと評価、日本教育工学会論文誌、査読有、35巻、2011、1—4

[学会発表] (計4件)

(1) 伊藤崇達、学習支援ニーズと自律的動機づけとの関係—中国語学習における学習方略—、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月16日、東京

(2) 伊藤崇達、親によるいかなる動機づけ支援が子どもの自律的学習を支えているか、日本教育心理学会第54回総会、2012年11月23日、沖縄

(3) 伊藤崇達、人間関係に関わる学習の要因と自ら学ぶ自己調整の方略—授業における動機づけプロセスを捉える新たな分析視点の提案— (シンポジウム「動機づけからとらえる授業研究のデザイン—教育心理学的アプローチから—)、日本教育心理学会第53回総会、2011年7月26日、北海道

(4) 伊藤崇達、自己調整学習理論の視点から (シンポジウム「動機づけ理論の再構築に向けて—現実からみた人の動機づけ研究の課題—)、日本教育心理学会第53回総会、2011年7月24日、北海道

[図書] (計2件)

(1) 伊藤崇達、北大路書房、自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ—、2012、31—53 (自己調整学習研究会 (編) / 第2章「自己調整学習方略とメタ認知」を分担執筆)

(2) 伊藤崇達、ナカニシヤ出版、コンピテンス—個人の発達とよりよい社会形成のため

に—、2012、3—11 (速水敏彦 (監修)、陳 惠貞・浦上昌則・高村和代・中谷素之 (編) / 第1章、第1節「学びのセルフ・コントロール」を分担執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 崇達 (ITO TAKAMICHI)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70321148

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者